以身伝しんぶん

奥村家住宅での展示

展覧会第二会場 奥村家会場

重要伝統的建造物保存地区、永原町にある築約150年の近江商人の邸宅〝奥村家住宅〟。

こちらには、一見してびっくりするような人形たちが展示されていました。

作者は、岩手県在住の鎌田紀子さん。筆者はお会いできませんでしたが、はるばる岩手県から作品を展示にいらして、お人形たちには頬紅などのお化粧をされていたそうです。

ギョロリと大きすぎるほどの目に細く長い手足や、時折覗く歯や爪。どこか不気味さを感じながらも、その〝からだ〟はわたしたちと変わらないものです。よくよく見ると、おへそもあります。

デフォルメさせながらも、鎌田さんは、人形たちを「人間のからだ」と変わりない〝者〟として作っているようで、不思議な愛着を感じさせるのです。

そして、この奥村家住宅のあちらこちらに昔から暮らしている、民話の精霊を見ているような懐かしささえ覚える…。

探せばいろいろなところに存在する人形たちは、わたしたちが「あたりまえ」に使っている「からだ」を、「まるで見えないものを見ている」ような体験を通して改めて意識させざるを得ない世界へと誘ってくれているかのように佇んでいるのでした。

（記者　冬木）

奥村家住宅の精霊たち

9月22日より開催されている展覧会「以〝身〟伝心　からだから、はじめてみる」は、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAと、奥村家住宅の2ヶ所で作品を展示しています。8組の出展者のうち、3名の作品がNO-MAのすぐ近く、奥村家住宅で展示されています。

こちらはNO-MAの雰囲気とはまた異なり、主屋と蔵に囲まれた広々とした庭や格子窓のある、築約150年江戸時代後期の近江商人の邸宅に、作品そのものがまるで以前からそこにあったかのように展示されています。

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAとご一緒に、ぜひとも町屋ごとアートとなっている、奥村家住宅もご訪問・ご鑑賞をお勧めいたします。

こちらでも思わず声を上げるような〝からだ〟をテーマにした魅力的な作品たちが皆さまをお待ちしています。

（記者　冬木）

「うずまきさん」とは何者でしょうか？奥村家住宅の庭の縁側に腰掛けると、緑の木々の中に置物があります。庭の風情にとても馴染んで。

この置物が、九谷焼陶芸家の米田文（よねだぶん）さんの作品です。

在るべきところに、昔から置かれていたような陶芸作品は、近寄ってよく見ると小さなうずが集まって構成されていることがわかります。

初めてこの作品を見たとき、記者たちは驚きと感心とともに、「よくよく見ていると、生き物のように見えてくる」「生命を感じる」と異口同音に話していました。

同じく、鑑賞に来られた方々も、「フジツボみたい」「珊瑚のようにも思える」と感想を述べていらっしゃいました。

現在、米田さんは金沢で九谷焼の伝統的な色彩で身近な動物や植物などを題材にした、独自の世界観を表現した作品を作っていらっしゃいます。

今回展示の「うずまきさん」と題されるシリーズは、2年間もの間にわたって没頭して作られていたとのこと。

指先に集中し、うずを作り積み重ね、からだからの発信を〝かたち〟と成し得た米田さんの渾身の作品にどうぞ触れてみていただければと思います。

いったい何が皆さまの手のひら・指先に伝わってくるのでしょうか。（記者　冬木）

ボランティア兼記者 竹間さんとプリンちゃん

長かった以〝身〟伝心展が今日（11/24）楽日を迎えた。

最後のボランティア活動が奥村家の午後だった。自分にとって今回の展覧会は鎌田さんのプリンちゃんに始まり、プリンちゃんで終った。

人形達の持つキャラクターをいつの間にか愛おしむようになった。まんまと術中にはまってしまい作者の鎌田さんがどこかでニヤッとしているのではと思うと楽しくなってしまう。

愛知からの男女、やはり障害のある方の支援をされているとかでNO-MAの活動を賞賛されていた。珍しく男がプリンちゃんを抱いて、女性がカメラマンで、最後の記念撮影。

個性的な作品群の多いNO-MAの展覧会ではこんなフォトスポットを演出すると来場者がより楽しく印象に残るようになるのではと考えた。

（記者　竹間）

ボランティアで過ごした奥村家の時間、鎌田さん作のプリンちゃんと一緒でもありました。

ボーダレス・エリア記者クラブInstagramアカウントはこちら
https://www.instagram.com/borderless_area_kisya_club